

文芸の広場

短歌、俳句、川柳、五行歌：短い詩形でふるさとを、日常を語るとき、その思いはいつそう強くなるのではないだろうか。

◆短歌

本気心——『稲穂』第16号を読み

女子なれどプロボクサーの道進む本気心を会誌に読みぬ
女子なれどラグビー選手ラグビーの道突き進む後輩を知る
女子にして医師志す後輩の素直心を会誌に読んだ
追手町小・東中学・飯田高校終えたるわれは上京せりき
伊那谷の飯田の町の仲ノ町の借家に生まれた八十四年前に

マスクして

ゆく川はながめて飽かず音に聞く翡翠あをきひかりまほろし
越して来し街に川あり水浴びも釣りも見ざれど岸边のさくら
友を見舞ひ夫逝きし部屋を訪ぬればあの夜とおなじ ひととは苦しむ
廊下よりベーグルを焼くにはひ来る去年よりいもうとこの家に棲む
江戸の世はなかりしマスクとがりたるマスクし間をあげ並ぶスーパー

秋も深まる

増上寺 徳川家菩提 参拝す 秋の日強く 木の間に漏れる
秋の日の 三田の山上 静かなり 歩こう会の 声のみ響く
泉岳寺 四十七士の 墓の前 線香の煙 絶えることなし
昼神の 伊那の華の湯に 身を浸す 向かいの山の 紅葉近し
二次会を 終えて身をおく 露天風呂 阿智の川面の 波光りたり

◆文芸の広場に寄せて◆ 日常に、詩歌の種を拾う

—尾根走る風を受けたりこの風は山を廻りて薄れゆくのか—
2月半ば、初春の陣馬山に登ったときのことだ。微かな蠟梅の香りを胸いっぱい吸い込んで、道端の路の臺を掘ったり、野生の猿の枝渡りを眺めたりしながら尾根に出た。その途端、一瞬の風が私をすり抜けていった。この風は幾度地球を廻っているのか、などと考えたことがすでに懐かしい。こんな些細なことが歌の種になる。それからまもなく、これまでの当たり前が通用しなくなる日が来ようとは、誰も思わなかっただろう。三密を避け、外出を避け、マスクを着用し、新しい生活様式とやらに慣れていかざるを得ない日常の中にも、詩歌の種は潜んでいる。例えば、今日の一日を、五七五のリズムに乗せることから始めてみてはいかがでしょう。

(下平紀代子)

奥村晃作 (高7回)

●おくむら・こうさく
「ただごと歌」を唱え、次の二著を著わした。「抒情とただごと」「ただごと歌の系譜」。その後、バージョンアップして「気付き、発見、認識の歌」で奥村短歌は解けるかと思われる。「赤石短歌の会」は事務局の吉川進久氏(高7回)が会員の詠草を取り纏め、電送し、奥村が感想を記し、添削を施したものを返送する形で目下継続している。9月から「いいだroom歌会」をスタート。

草田照子 (高15回)

●くさた・てるこ
去年の夏、妹とその息子と同居するために、代々木から杉並に引っ越しをした。救世軍ブース病院がすぐ後ろにあり、神田川も近。COVID-19のせいで、短歌講師として乗船予定だった飛鳥IIの世界一周がなくなり、カルチャアの教室も6月になって再開されたが、この間、静かな老後のような生活を味わった。

脇坂英文 (高17回)

●わきさか・ひでふみ
平谷村出身、飯田で育つ。千葉県柏市在住。在京同窓会行事の「飯田ゆかりの地を歩こう会」に参加。増上寺・三田の山・泉岳寺等を訪ねた。また、昨年、秋も深まる信州昼神温泉川沿いの「伊那華の湯」に泊まり、高校卒業55周年を祝った。

募集!

『稲穂』第18号「文芸の広場」への
ご投稿をお待ちしています!

『稲穂』第18号「文芸の広場」へのご投稿をお待ちしています!

短歌、俳句、川柳、五行歌、詩などお好きなジャンルで投稿ください。テーマは「ふるさと」または自由。

それぞれ5作品+プロフィールと投稿作品に寄せて(150字程度)を添えてお送りください。

◆締め切り/2021年5月31日(月)

◆送付先/メール、郵送にて「稲穂」編集委員会(101ページ参照)まで。